

あいさつ

東山梨教育協議会会長 榆井俊彦

東山梨教育協議会の研究成果を収録した「東山梨教育研究」が、第53号の発刊を迎えました。この研究集録が、東山梨教育協議会の創立以来、半世紀をこえてさらに脈々とその主旨が引き継がれ、確実に築き上げられてきた実践の成果であることは周知の通りです。東山梨の子どもたちの、より良い成長のために、教育三者が一体となって進めてきた組織研究の成果であることは言うまでもありません。

さて、我が国の抱えている多くの社会問題にかかわって、子供たちの生命尊重の心・自尊感情・基本的生活習慣・規範意識・人間関係形成力・社会参画意欲など全ての指標が下がり、心の活力が弱っているように感じます。子どもの活力を育むために、「自己を開発する力」を身につけさせたい、そのためには、生き方に選択肢があること、生命観に深さがあること、柔軟な自尊感情があることが必要であると考えます。

学校におけるいじめ問題への対策は、今までにない早急さを求められてきています。国の教育政策推進のスピードが加速されています。例えば、「道徳」をみた場合、2013年2月の教育再生実行会議では、いじめ対策として、小中学校での道徳の教科化を提言し、その年の末には、有識者による「道徳教育の充実に関する懇談会」が文部科学省内で開催され、①「心のノート」の全面改定、②教員の指導力向上方策、③道徳の特性を踏まえた新たな枠組みによる教科化の具体的な在り方等について、文部科学大臣に報告、提出がなされました。以来、「特別の教科 道徳(仮称)」としての準備が進められ、教育現場での改革は現実のものとなってきています。特に、今年度、教育現場で子供たちと向き合う中で、本当に私たちの心を傷めたのは、「命」に関わるニュースでした。教育に携わる者として、もう一度教育の根幹を見直すことの戒めをもらった気がしました。

学校教育の目的である、一人ひとりの子どもたちに「生きる力」を身につけた人格の完成と、民主的な社会の形成者としての成長を保障する教育は、学校現場だけの力では成り立ちません。学校、家庭、地域が力を合わせて取り組むことが必要不可欠です。学校、家庭、地域がそれぞれの責任と役割をしっかりと果たすとともに、三者が連携し合い共通の課題に対して取り組むことが重要だと思います。特に、私たち教師の果たす役割、求められる責務は重要であり、難しいものになってきています。そのためには、まず教師は授業力を磨かなければなりません。「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、児童・生徒が「どのように学ぶか」という、学びの質や深化を重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的に学ぶ学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング」の指導とその方法を充実させていくことが今、求められています。

幸い、東山梨地区は、多くの先輩方が、これまで素晴らしい実践を積み上げられてきました。財産を生かし、さらに私たちが研鑽を積むことこそが、子どもたちの輝かしい未来を約束するための一歩であると確信します。本誌が、今後の教育研究の継続・発展の一助となることをご期待し、これまで私たちの研究活動に対し、ご指導、ご支援をいただきました多くの方々に心よりお礼を申し上げ、あいさつとさせていただきます。